

投稿

オリオンはどこから？
～星座物語の源泉～

加藤賢一（星学館）

1. はじめに

わが国では現在もギリシャ・ローマ神話がプラネタリウムや絵本の中で元気に生き続けている。プラネタリウムで西欧流の星座や神話を語らなければならぬ決まりはないが、現実はそのようになっていて、当の西欧より盛んに紹介しているのだから、何とも不思議な光景である。

ところで、そこで語られるギリシャ・ローマ神話はどこにあるのだろうか？ かつて筆者は野尻抱影や山本一清などの書籍から得た知識で紹介していたが、居心地の悪さを覚えながら語っていた。それは、これらの話の出所を調べようともせず、また、様々な疑問があったのにそれに対応しようともしないままだったからで、例えば、オリオンが乱暴狼藉者でプレアデスを追いかけて、サソリに刺されて死んだ後、星座として天にあげられたという話はそもそも神話のどこに書いてあるのか、と問われても回答できなかった（恥ずかしながら、今もで）。

そんなところに、2021年6月20日に開催された本会近畿支部会の席上、小島敦氏より「ギリシア人と星座と神話」と題する発表があった。その概要は『様々なところで話される「星座のギリシア神話」は今や普及の面では欠かせないものである。しかし、そんな知名度に反し、我々は「星座の神話集」のようなギリシア文学の名を耳にしない。この理由は何故だろうか。』というもので、筆者の積年の疑念に答えて貰えるのではないかと思われたが、少しもやもやが残った。そこで、手元の文献を調べてみたので、その結果をご報告したい。星座物語が天文教育の場にふさわし

いと思っているわけではないが、本会の企画に触発されたためであることからご寛恕戴きたい。

2. ギリシャ神話と星座の関係への疑問

神話とはそんなものであろうが、星座物語を聞いていると荒唐無稽な話の数々に、たとえば、次の様な疑問が湧いてくる。

表1 いくつかの疑問

- | |
|---|
| Q1- 神々や付随したものが星座に見てられたことや、それにまつわる物語の原典はなにか？ |
| Q2- 神々を星座に見た時、単に神話を当てはめただけか（見立て論）、真に天で行動しているとしたのか（天住論）？ |
| Q3- 神の子は全て神か？ 例え、ペガサスや怪物テューポーンでも神なのか？ |
| Q4- 神と人間の子は神か、人間か、別の何かか？ |
| Q5- 神の子が人間となる場合の条件とは？ |
| Q6- ニンフとは何者か？ 神か？ ニンフの子（たとえば、プレアデス姉妹）は神か？ |

Q1 はそもそもどこに書いてあるか、という一番の疑問であり、その原典を辿れば Q2 以下の疑問は解消するはずである。「ケンタウルスは神か」という疑問がネット上で提起されていたが、原典に当たればわかる性質のものであろう。

3. ギリシャ時代の神話

俵プラネタリウムで語られるギリシャ神話なるものはほとんどがオウィディウス（ローマの詩人、BC43-AD17?）やウェルギリウス（ローマの詩人、BC70-AD19）などにあることが高津（1965）[1]とブルフィンチ（1970）[2]から即座にわかった。これらはローマ時代の作だから、星座物語はどうやらギリシャ神話をヒントにそれを膨らませて空想物語に仕立て上げられたものというのが真相のようである。

3.1 旧約聖書

原（1982）[3]によれば、星座や星の名称は紀元前5世紀頃に書かれたとされる旧約聖書の中に登場するという。確かに、新改訳聖書（1970）[4]を見ると「ヨブ記」、「アモス書」におうし座（くま座とも）、オリオン座、すばる座（プレアデスとも）、南の天の室（コールサックとも）が記載されている。ただ、名称だけなので神話を踏まえているかどうかは不明である。そもそも旧約聖書が書かれた当時、現在オリオン座他と訳されている語がギリシャ・ローマ神話のオリオン他を表していたのか、筆者には不明である。

3.2 ホメロスのイリアス

ギリシャ神話の中心をなす英雄譚のホメロス（BC8世紀頃）作イリアス、オデッセイに星座物語に登場する神々が見えている。例としてオリオン、ヘルクレス、ペルセウス、カシオペヤ、ペガサスの5つをとり上げてみると、イリアス（1992、松平訳）[5]には下記の回数記載がある。

オリオン ー3ヶ所
ヘルクレスー5ヶ所
ペルセウスー3ヶ所
カシオペヤーなし
ペガサス ーなし

たとえば、オリオンの最初の記載は次のようになっている。

『そこには大地あり天空あり海がある。疲れを知らぬ陽があり、満ちゆく月、また天空を彩る星座がすべて描かれているーすばる（プレアデス）に雨星（ヒュアデス）、さらに力強いオリオン、また「熊」座、これは別の名を「車」座ともいい、同じ場所を廻りオリオンをじっと窺っている。この星のみはオケアノスの流れに浸かることがない。』

「力強いオリオン」と記されており、現在のイメージに近いオリオン像と推察される。黄道星座がないのは不可解としても、日周運動や周極星も理解されていることは特筆したい。そして、上の星々が旧約聖書と重なるのは一層興味深い。

だが、イリアスに登場するオリオンは星座としての名前ではなく、神と断定する材料はない。増して冒険譚などは、である。

ヘルクレスについての14歌324行の記述では

『アルクメネは豪気の子ヘラクレスの、セメレは人間どもの喜びであるディオニュソスの母となった女だ』

となっているので、これも現在のイメージ通りと言えるだろう。

また、ペルセウスについても、『万人に卓越した勇士ペルセウス』とされているから、同様である。

このように形容語句付で登場するのでこれらの名称の裏にはそれなりの話があったと想像されるが、カシオペヤやペガサスなどは全く見当たらず、総じて極めて冷淡な扱いである。現在語られているような物語は、長文のイリアスにもかかわらず、望むべくもない。彼らは決してギリシャ神話の主役ではないからだろうか。

3.3 ホメロスのオデッセイ

イリアスの続編とも言えるオデッセイ（松平訳（1994）[6]）では、次の回数登場する。

オリオン ー4ヶ所
 ヘルクレスー3ヶ所
 ペルセウスーなし
 カシオペヤーなし
 ペガサス ーなし

第5歌には「純潔の女神アルテミスが、オルテギュの島で彼を襲い、優しい矢で命を奪ってしまわれた」と、初めてオリオンの動向にかかる表現が現れている。第5歌では他に、イリアスと同様に、プレイアデス、牛飼座、車座の異名を持つアルクトス（大熊座）があり、アルクトスはオリオンを窺いながら巡回するという文が見える。

ヘルクレスは剛腕の徒として名前が出ているだけで、オリオンほどの扱いも受けていない。ペルセウス、カシオペヤ、ペガサスについては上のとおりである。

3.4 ヘシオドスの神統記

ヘシオドスは紀元前700年頃に活躍した古代ギリシャの詩人で、「仕事と日々」、「神統記」などの著作があり、ホメロスと時代が重なっているとも言われている。「神統記」ではギリシャの神々の系譜を扱い、ゼウスの正当性を主張したとされる。イリアス、アデッセイがトロイア戦争を巡る軍記物という感じが強く、文字通りまだ地に足が着いているのに対し、本書の神々の足は軽く、空間移動は頻繁に行われており、物語の色合いが濃くなっている。

広川訳（1984）[7]によって見ると、

オリオン ーなし
 ヘルクレスー7ヶ所
 ペルセウスー1ヶ所
 カシオペヤーなし
 ペガサス ー3ヶ所

という扱いである。ただし、全体に短い詩篇

だけに名前だけの登場である。ただ、ヘルクレスだけは「幸いなる者かな 不死の神々の間にあって偉業を成し遂げ いまや 煩いもなく 不老のまま 永久に暮す彼は」と解説付きだが、不老のままというだけで、星になったとは書かれていない。

それはヘルクレスだけではなく、星にされるという話は全く出てこない。もっとも、ティタンのような天ウラノスと地ガイヤの子たちには天地の移動は自由である。

ここで興味深いのは女神エオス（曙）が明けの明星と星辰を生んだという380行以降の記述で、これではヘルクレスとて星になりにくい。それ以上に気になるのは天と星の関係で、ここでは別物として扱われているように思えて仕方がない。

3.5 ギリシャ時代のまとめ

その他の著作にも星座の神々が登場していることが知られているが、これらについては原（1982）[3]を参照して載きたい。

まず紀元前8世紀頃とされるホメロスの時代に、限定的とは言え、いくつかの星座が認識されていた。しかし、最も重要と思われる黄道星座への言及がなく、心もとない。また、ギリシャの神が星や星座になったと明確に記された箇所はここまでの3書にはなかった。以上から、ギリシャ時代、殊に紀元前700年頃には、現在の星座名に相当する星の並びは認識されていたものの、それらに神話を当てはめたケースはなく、またギリシャの神々や事物が星座になった例もなかった。つまり、ギリシャ神話には神が星座になる話はない—これがここでの結論である。

もし、旧約聖書に登場するオリオンが本当にギリシャ神話のオリオンと意識して記載されたとすれば一神教のユダヤ世界にギリシャの神々が入り込んでいたという興味深い現象があったことになり、別の問題が持ち上がる

が、これはここで議論する話ではない。

4. ローマでの神話の改変

紀元 1~2 世紀に全盛期を迎えた古代ローマ帝国がギリシャの文化を取り入れたことは周知のことである。貴族階級、支配階級がその正統性を主張するため血統の重みを強調することは、わが国では記紀に見られるように、どこにでもあることで、ローマでは伝統あるギリシャ神話を借りてそうした神の末裔であると主張する物語が作られた。その中のいくつかを見てみよう。

4.1 オウディウスの変身物語

ローマの詩人オウディウス（BC43-AD17?）に「変身物語」と訳される著作メタモルフェス[8]がある。ギリシャ神話の一部が荒唐無稽な物語に改変され、ローマの伝説的成立史へと繋がり、最後にカエサルがほうき星になり、神へ変身したとして終わるといった目的が明確な物語である。登場人物や神々はやがて動物や植物や、はたまた、神に変身するというハチャメチャぶりだから、天地との行き来なども苦もなく、地上の神々や事物がやがて星座になって上る話が数ヶ所に登場する。登場神やその特徴、一部の地域はホメロス等から借りるも、換骨奪胎、全くローマ的に似て非なるものに改変してしまった。

さて、5つの星座の登場回数である。

オリオン ー3ヶ所

ヘルクレスー第9巻、12巻の各所

ペルセウスー第4巻、5巻の各所、

カシオペヤー1ヶ所

ペガサス ー2ヶ所

3ヶ所に登場するオリオンだが、2ヶ所は単なる夜空の背景の星座として、他は「オリオンのふたりの娘」という表現となっているだけで、物語はなく、現在の扱いとは大違いである。カシオペヤとペガサスは単に名前だ

けの淡泊な扱いである。

ヘルクレスは結構大きく扱われていて、第9巻、12巻の随所に登場する。第9巻ではヘルクレスがヘラの命じた危険な冒険の後（ただし冒険譚はない）、策略によってヒドラの毒のついた衣を身にまもってしまって瀕死となり、ついに焼身自死を図ったこと、それを見た父ゼウスがやがてヘルクレスを神として天上界へ迎えようと言ったことが紹介される。第12巻で亡きヘルクレスの偉業をめぐって息子のトレポレモスと対するネストルのやり取りがあり、生前、偉業と言える冒険とともに数々の理不尽な殺戮を行ったことが告発される。このように、星座物語の中心ではなく、その脇、その後のことが語られる。まるで、歌舞伎の勧進帳で義経をさておき弁慶が主役になっているように、仮名手本忠臣蔵では討ち入りの脇役が活躍するように、である。

時間的にその後を扱うという体裁になっているのはペルセウスでも同じで、ケペウスとの交渉、化けくじらを刺し殺したこと、そしてその後、メデューサの首を携え、近寄る敵をばっさばっさとなぎ倒す話が続く。もちろん、後の方が主題である。

その他で興味深いのは星座の記載で、第8巻にうしかい座、おおぐま座、オリオン座が、第13巻にプレイアデス、ヒュアデス、おおぐま座、オリオン座が夜空の背景として登場する。これらはイリアスを踏まえただけのようで、8巻にアリアドネの冠をヘラクレス座とへびつかい座の間に置いたという表現があるので星空に格別の配慮があるかなと思ったが、こうした表現はここだけで、どうも星座に頓着していた様子は窺えない。

一方、13巻には「黄金まばゆい天界に座を占めている神々のなかで」というアウロラ女神がわが子を失って嘆く場面がある。アウロラ女神が天にいるのは当然としても、他の神々もたくさんいたらしい。しかし、オリオ

ンやプレイアデスの扱いを見るとこれらが神として崇められている様子は見えず、釈然としない。

ホメロスの作品が民間伝承を採録したという雰囲気があるのに対し、本書はオウィディウスの創作という匂いが濃く、荒唐無稽の物語につきもののご都合主義が満載で、星座物語には持って来いである。ただ、星座物語そのものではなく、限定された神々についての後日談なので、現在の星座物語の骨格を成す作品とは言えないようである。

余計なことだが、前述のギリシャ時代と比較すると、物語の飛躍（特に時間的な）が大きく、間に別の話がないと繋がらないように感じられる。本書ではヘルクレスやペルセウスのその後が語られているが、肝腎の本体が無いからで、たとえば、次に紹介するアポロドーロスのようなものがここに欲しいのである。

4.2 アポロドーロスのギリシア神話

アポロドーロスは紀元 1～2 世紀のローマの人とされていて、「ギリシア神話」という著作がある。邦訳は高津 (1994) [9]によってなされている。ここには先の 5 つの名称が次の回数登場している。

- オリオン ー2ヶ所
- ヘルクレスー26ヶ所
- ペルセウスー5ヶ所
- カシオペヤー1ヶ所
- ペガサス ー2ヶ所

少し長くなるが、オリオンが登場する場面を引用しておきたい。

『デーロスにおいてアルテミスはオーリーオンを殺した。人は彼が大地より生れ、その身体は巨大であったと言っているが、ペレキューデースは彼をポセイドーンとエウリュアレの子であると言う。ポセイドーンは彼に海上を闊歩する力を授けた。彼は〈先ず〉ヘ

ーラーが美しさを女神と競ったという廉で地獄に投げ込んだシーデーを妻とした。その後キオスに行ってオイノピオンの娘メロペーに求婚した。しかしオイノピオンは彼を酔わせ、眠っている間に彼を盲目とし、海辺に棄てた。しかし彼は〈ヘーパイストスの〉鍛冶場に行き、一人の子供を奪って肩に乗せ、太陽の昇る方向に導くように命じた。そこに到着して太陽の光線によって治癒せられて視力を回復し、大至急でオイノピオンにむかって道を急いだ。しかしポセイドーンが彼のためにヘーパイストスによって造られた家を地下に用意せしめた。曙（エーオース）がオーリーオンに恋して彼を掠い、デーロスに連れて来た。というのは曙（エーオース）がアレースと床をともにしたというので、アプロディーテーが彼女を絶間なく恋に身を焼くようにしたからである。オーリーオンは、一部の人々はアルテミスに円盤投の競技を挑んだために滅ぼされたと言い、またある人々はヒュペルポレイア人の所より来ていた乙女の一人オーピスを暴力を以て犯したためにアルテミスに射られたのであると言っている。』

このように、現在、私たちが知るところのオリオン像が描かれていて、イリアス始めこれまでの作品の扱いとは全く異なる手厚いものでなしようである。しかし、記述はここまでで、彼が星座になっていることや、天でプレヤデスを追い回していることなどは見当たらない。

ヘルクレスについては、よく知られている話、つまり、生後 8 ヶ月のヘルクレスがヘーラーの送った蛇を絞め殺したこと、18 歳でキタイローン山の獅子を退治し、その皮を身にまとい、口を胃にしたこと、棍棒を自作したことなどは 2 巻 4 章で語られ、次の 2 巻 5 章では獅子はテューポーンから生まれた不死身の獣だと矛盾した話が紹介されていて、あちこちから話を寄せ集めたことを露呈している。

また、9頭のヒュドラー退治、そこに少しだけ顔を出す大蟹、その他、黄金角の鹿、エリュマントスの猪、10に余る冒険を強いられる話やその後のことが2巻12章まで延々と続く。ヘルクレスはイリアス時から格段の成長を遂げたようである。オリオンとは比べものにならないほどたくさん登場しており、そのイメージは具体的で、鮮明で、棍棒に獅子皮などは、オリオンの星座絵に重なるものがある。星座で目立つオリオン、神話で目立つヘルクレス、この両者の違いを見るとちぐはぐな感否めず、星座と神話の進化で差があったようである。

ペルセウス、カシオペア、ペガサスなどが登場するいわゆるエチオピア王家の物語は若干の異同はあるとしてもほぼ現在の形で紹介されている。

以上の5点の神々について見ればいずれも今日の星座物語に近いが、星座になったとはされていない。だが、星になった話がないわけではなく、カリストが死んだ時、ゼウスはカリストを星に変えてアルクトス(熊)と呼んだ、という一節はある(3巻8章)。

総じて、本書はこれまでの文献の中では現代の星座神話に最も近いと言える。

4.3 ローマ時代のまとめ

星座を紹介する場合、しばしばギリシャ神話と言うが、星座物語のストーリーはほぼローマ時代の少数の著者による創作である。筆者もあまり意識することなく、ギリシャ神話と言ってきたが、せめてギリシャ・ローマ神話と言うべきであったと反省している。荒唐無稽な話の材料にされて、ギリシャの神々が憤慨してはいないかと心配するばかりである。

以上、現在の星座物語に近いものが出現したことを見たが、その全てをカバーするような文献はなく、現在のそれは諸文献の内容をまとめ、都合の良いところだけを選択したも

のと言えそうである。どのように改変するか、それは後世の著者たちの采配であったろうから、百花繚乱、様々な可能性があったということで、野尻版とか、山本版と言うべき性格を帯びていたと言えそうである。

5. 星座とギリシャ・ローマ神話の融合

古代ギリシャ世界の星座が古代メソポタミアから強い影響を受けていることは多くの文献に見られる(たとえば、近藤(2010)[10])。古代メソポタミアで重視されていたのは黄道12星座や日月惑星だった。ただ、それらがいつ頃、どのようにギリシャ世界に伝播したかは、当然ながら、良くわからないが、タレス(BC625-545頃)が日食を予報できたのは古代オリエント天文学を会得していたからだろうと言われている。もしこの紀元前600年頃に黄道星座を始めとする星座の数々がギリシャ世界に流入してきたとすれば、その前に成立していたイリアスなどに黄道星座等が入っていないことが自然に了解される。

5.1 鍵はアラトスのファイノメア

ところで、原(1982)[3]や早水(2018)[11]によれば、小アジアに生まれたアラトス(BC315-240)が著した「ファイノメア」にプトレマイオスが紹介したヒッパルコス(BC147頃-112頃)の46星座に先行する44星座が紹介されているという。これはエウドクソス(BC408頃-355頃)の同じ題の書に基づくものということだから、現行星座の多くが紀元前400年頃には成立していたことになる。

「ファイノメア」(Mair & Mair 訳、1921)[12]を見ると、その44星座の形や向き、構成する星々や配置、隣接星座、神話などが紹介されていて、現在の星座絵を彷彿とさせる文章が並んでいる。ペルセウス、カシオペア、ペガサスは相当詳しく、オリオンはやあっさりだが随所に登場するといった具合である。

たとえば、オリオンなら

『おうしの前方、斜め下に巨人オリオンがいる。晴れわたった晩に、高みに大きく広がる彼の姿を眺め、それから視線を移そうとしても、他の星がもっときれいに見えるなどと想像してはならない』

という趣旨の文章になっている。ただ、これが全てで、ペガサスでは『馬のへそとアンドロメダの頭に普通の星が1つある』以下、その何倍も具体的に詳細が語られるのと対照的である。

後半に各星座の相互の位置関係と日周運動の様子が紹介されていて、そこにオリオンは様々な獣を倒していた乱暴者であること、悩まされていたアルテミスがさそりを送ってオリオンを殺したこと、さそり座が上るとオリオンは西に行くことが載っている。だが、ここにもプレアデスを追いかけている話はない。だが、ここまでで、オリオンへの疑問は相当解けた。

このように、この「ファイノメア」こそ、星座と神話をつなぐリンクとなる文献と思われる。これまで紹介した古代ギリシャの文献にはなかったほど詳しく星座やそこに含まれる星の配置が語られ、星座絵を描くことができるほど精細に紹介されている。それにしてもオリオンには淡泊だが、詳しく解説するまでもなかったのかも知れない。

中で興味深いのは、早水 (2018) [11]が紹介しているヘルクレス座で、「ファイノメア」には「この人物の名はわからない」と記載されていると言う。確かに、Mair & Mair 訳 (1921) [12]では、

『日周運動の軌道円のすぐそこに、仕事に励む人に似た、幽霊のような姿が見える。誰も明確な呼び名を知らないし、かがんで何をしているかもわからない星座で、単にひざまづく者と言われている。・・・曲がったりゆう座の頭の真ん中に、彼の右足の先が載っている』

という意味の文章となっている。そして、全編のどこにもヘルクレスの名は見当たらない。

嫌と言うほどアポロドーロスの「ギリシア神話」[9]に登場していたヘルクレスだが、その200~300年前には影が薄かったようで、「ファイノメア」の後にヘルクレスのイメージが拡大、固定化していったように見える。それと同時に、この時代に星座とギリシア神話の融合が徐々に進行していた様子が見える。現在のヘルクレス像はローマの産物だったようだ。

このファイノメアの完成度は高く、エウドクソス一人の創作とは思にくい。それまでに多くの人たちの手を経た話をまとめたのではなかろうか。それまでにどの領域をどの星座にし、どのような姿と見るか、という星座観が相当程度合意されていたのだろうと想像する。後のアルマゲストで極めて無味乾燥なものとなっていたのは、そうしたどろどろした過程を終了し、完成していたからだろう。

5.2 融合の時期とQ1への答

以上、まとめると、紀元前600年頃に古代メソポタミアからもたらされた星座に自らの世界観を融合させる作業がその後2世紀にわたって行われ、紀元前400年頃に現行星座とそれに付随した神話の基本形ができ上がった。

このように考えると、旧約聖書に登場するプレアデス、ヒュアデス、オリオン、「熊」座と訳されている星座は単に星の集合体に付けた名称を現代風に訳しただけで、ギリシア神話の意味合いはなかったと解することができる。

現在の星座物語の内容はギリシア神話に登場人物や大まかな設定を借りて、紀元100年頃にローマ風に大幅に拡大、改変されたギリシア・ローマ神話で、ローマに力点を置くべき内容のものである。これが「ファイノメア」のように星の配列を記した星座観と融合し、

現在の星座の姿とそれに伴うお話というスタイルができた。

これが最大の疑問 Q1 に対する答である。

6. その他の疑問について

その他の疑問に少しコメントしておきたい。

6.1 Q2 - 見立てか天住か？

ギリシャの神々は基本的にオリンポス山にいます。ゼウスは天の支配神なので、天地を往復しているし、カリストが大熊にされて天にあげられた話や、ヘルクレスはゼウスの力により天にあげられた話があるから、天に行くことはあったが、ギリシャの全ての神々が天に上がり、星座になったわけではない。そもそも天にあがることと星になることは別物と認識されていた可能性もある。つまり、多くは星座に見立てただけ、と言える。

6.2 Q3 - 神の子は全て神か？

神の子は神、が基本ではあるが、神から神ではなさそうなものも生まれている。

ペガサスはアポロドーロス[9]に登場し、「有翼の馬」とされているが、それ以上はわからない。

テューポーンは「イリアス」ではテュポエウスという名前になっていて、正体は皆目わからない。アポロドーロス[9]では7ヶ所に見えていて、人と獣との混合体とされ、どんな山よりも高く、百の竜の頭が生えていたなどと外見やらが紹介され、天へ突進し、ゼウスと壮絶なる戦いをくりひろげた様子が描かれている。テューポーンは神の子に違いはないが、人と獣との混合体に化身した。

ケンタウルスやケイローンは「イリアス」に登場するも、その特徴についての神か人間かの記載はない。アポロドーロス[9]になると「半人半獣のケンタウロス」と明記してある。その一方で、ケイローンは不死だったともし

ているので、ケンタウルス族は半人半獣だが、ケイローンは神がかりだったようである。なお、ケンタウロス族はヘーラーの化身である雲とイクシーオーンの子とアポロドーロス[9]は書いている。

神の子が全て神とは限らない、というのが結論である。

6.3 Q4 - 神と人間の子は神か？

まず、神と人間が交わることができるかどうかだが、これは随所に登場していて疑う余地はない。高津(1965)[1]はヘシオドスの「名婦伝」(現物は散逸)は「神々との交合によって英雄の母となった人間の女のカタログ」と紹介している。こうして、神から貴族階級が誕生したということにするわけで、神話には欠かせないと言うより、神話を作る目的そのものである。結論、神と人間の子は少なくとも人間にはなれる。

ヘシオドス[7]はゼウスは人間のセメレとの間にディオニュソスをもうけたとしているから、神になることもあった。ただし、今ではセメレもディオニュソスも神になっていると言う。

オウィディウス[8]でヘルクレスがゼウスの力によって神になったことが語られる。神になることができたのは、父ゼウスから受け継いだところは不死という神性を保っており(母親アルクメネは人間)、その部分が地上でのつとめを終えた時、神とし、天上界に迎えられらるるとしている。「その部分」がどの部分なのか、やや不明瞭だが、しかるべき暁にゼウスの裁量によって神になれたようである。

結論、神と人間の子は神にもなり得る。

6.4 Q5 - 神の子が人間となる場合の条件とは？

イリアス[5]やオデッセイ[6]では神か人間か、別物か、明示されていない場合が大半で、

わかりにくい。神と神の子が人間になり得るのかも含め、目下、不明である。

6.5 Q6ーニンフとは何者か？

各種文献のどれにもニンフの定義はない。姫神としている場合があり、ゼウスと法の女神テミスからニンフが誕生している（アポロドーロス）から、神のカップルからニンフが生まれることは間違いない。ネレウスの娘たちのネレイデスは海底に住むニンフたちで（イリアス）、精霊とされるが、その定義もなく、神と人間との中間的存在かと匂わせるだけで、文献上では正体不明である。

最後に、「ファイノメア」についてはすでに伊藤照夫氏による下記の邦訳が出版されていることを紹介しておく。

『ギリシア教訓叙事詩集』、伊藤照夫(2013)、京都大学学術出版会

これは小島敦氏よりご教示戴いたが、氏には他にも重要なコメントを戴き、草稿を改良することができた。ここで厚く御礼を申し上げたい。

文 献

- [1] 高津春繁（1965）『ギリシア神話』、岩波新書。
 [2] 大久保博訳（1970）『トマス・ブルフィンチ著ギリシア・ローマ神話』、角川文庫。
 [3] 原恵（1982）『星座の神話』、新装改訂版、

恒星社厚生閣。

- [4] 新日本聖書刊行会訳（1970）『新改訳聖書』、いのちのことば社。
 [5] 松平千秋訳（1992）『ホメロス・イリアス』、岩波文庫（上下2冊）。
 [6] 松平千秋訳（1994）『ホメロス・オデッセイア』、岩波文庫（上下2冊）。
 [7] 廣川洋一訳（1984）『ヘシオドス・神統記』、岩波文庫。
 [8] 中村善也訳（1981、1984）『オウィディウス・変身物語』、岩波文庫（上下2冊）。
 [9] 高津春繁訳（1994）『アポロドーロス・ギリシア神話』、岩波文庫。
 [10] 近藤二郎（2010）『星座神話の起源・古代メソポタミアの星座』、誠文堂新光社。
 [11] 早水勉（2018）『エーゲ海の風・第3回姿を変えた星座たち<後編>ギリシア伝来後の変化』、月刊星ナビ、2018年7月号、アストロアーツ。
 [12] Mair, A. W., Mair, G. R. 訳（1921）'Callimachus, Hymns and Epigrams. Lycophron. Aratus.', Loeb Classical Library Vol. 129., London: William Heinemann.

加藤賢一

* * * * *